



書下ろし新潮劇場

房 未必の故意

新潮社

書下ろし新潮劇場

あ べ こう ぼう
安 部 公 房

あ ひつ こ い
未 必 の 故 意

昭和46年9月10日発行／昭和46年11月10日3刷

発行者■佐藤亮一／発行所■株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71／振替東京808

印刷■凸版印刷株式会社／製本■新宿加藤製本

©1971, Kōbō Abe, Printed in Japan

落丁本はお取替えいたします

定価520円



未必の故意
十一景

〔登場人物〕

消防団長

ちんば

めっかち

つんぽ

若い女

教師

島民A

B

C

断続する閃光。映画の齟落しの中で、倒れている一人の男（江口某）をとりかき、棒で打ちすえている一群の島民たち。全員、黒のゴム長靴に、黒いゴム引きの合羽、黒頭巾といういでたち。砂袋を叩くような、重くて鈍い音が、はげしく休みなく続いている。

江口の声（荒い息の下から、ときれときれに）こらえてくれ……おう……こらえてくれよお……いてえなあ……こらえてくれよお……

消防団長 みんな、なぐったか？ 一発でいいから、全員してやらんと、つまらんどぞ。

江口の声（息もたえだえに、うめきながら）もう、こらえてくれんかい。あやまるけ。

こらえてくれよお。痛えのお……

消防団長　一致団結。ほら、遠慮はつまらんぞ。

物音、止み、全体が淡いシルエットの中で静止する。島民Aが、スポットで浮び上る。

島民A（不器用な朗読調の棒読みで）この菊の島におきまして、バー、パチンコ店、アイスクャンデー販売、ならびに映画館「菊座」などを経営しております、江口イタル三十八歳を、私が島民ともども棒切れにてなぐり殺した件について、おたずねでありますから、なるべく詳しく申し述べたいと思います。その晩は、真の闇夜というほどではなく、道もよく分り、人の動きもよく分りました。しかし、人の顔については、よほど近づき透かして見なければ、判別は困難でありました。私達の仲間には、しばらく藪の中にかくれておりましたが、十一時三十分ごろでありましようか、やがてその日の売り上げの計算

をおえた江口が、菊座の裏口から出てまいり、隣のバチンコ屋を覗きながら、「なんじゃ、今日も客は一人もおらんのか。島の奴等は、けちでいかん」と、誰に言うともなく大声でおらんだのであります。江口のバチンコ屋は、玉の出が悪く、絶対にもうかったためしが無いので、誰もが敬遠しているのですが、江口が日頃から非常に気が荒く、乱暴者であることを私は知っておりましたから、恐ろしくて、すぐに塵芥箱のうしろに隠れるようにしました。そのとき、反対側から現われた私達の仲間が、江口をとりかこみ、おだやかに問答しはじめたのでありますが、いきなり江口が下駄をぬいで手に持ち、誰かに打ちかかったので、ついになぐり合いになってしまったのであります。最初に江口をとりかこんだのが、誰々であったかは、へだたりもあり、暗くてよく分りません。やがてその一団が、広場の方へ移動しはじめましたので、私やその他の者も、おずおずとその後について行ったのであります。私はすぐに飛び出して行って、江口をなぐりつける気にはなれず、神社の公衆便所の石段に腰をかけ、タバコを一服つけながら、しばらくなぐり合いを見物し

ておりました。見物しているのは、私だけでなく、ほかにも大勢おりました
が、暗くて誰であつたかはよく分りません。なぐり合いの一团は、鳥居と銀
杏の木のあいだを、幾度も往復し、そのたびに江口は倒れたり、起き上つた
りしていたようにありました。そのとき誰かが、「みんなでなぐらんと、つ
まらんど。一致団結の約束を忘れたか」と、声をかけて来ましたので……

背景の中から、消防団長が進み出る。いかにも島民の信頼を一身に集めているとい
つた、落着きと余裕がうかがわれる。

消防団長 (頭巾を取りながら、さとすように) ちがう、ちがう……ちがうちょううが。

島民 A ちがうちょうやせんじやろ。書いてもろうたとおり、丸暗記じゃけ。

消防団長 誰もそげな誘導はせんかったはずじゃ。そうじやろ？

島民 A ……でもなあ、丸暗記じゃけ、ほかにはよう言いきらんよ。

消防団長 (含羽の下から、手書きの書類を取出し、唾をつけた指で手早くめくり) おかしいな

……あ、ここだ……(読んで) そのとき、誰かが……

島民 A やはり、誰かが、じゃろ？

消防団長 こいつは切り捨てじゃ。誰か、は飛ばして、（読み進み）「みんなでなく
らんと、つまらんぞ……」

島民 A （後をつづけて）「一致団結の約束を忘れたか」

消防団長 ……と、来て、この後は訂正じゃな。（しばらく考え）と、反省の声にう
ながされ……

島民 A と、反省の……

消防団長 声にうながされ……

島民 A 声にうながされ……

消防団長 後はそのまま。（読みつづけ）私もいよいよ、なぐり合いの所に出て行
きましたところ……

島民 A （口ごもりながら）……と、反省の声にうながされ、私もいよいよ、なぐり
合いの所に出て行きましたところ……

消防団長 （ねぎらいの調子をこめて）そうじゃ、うまく符合しちよる。本当の話ん、

ごたるぞ。

島民 A (前の朗読調にもどって) 江口は坐り込んで頭をかかえ、「こらえてくれ、こらえてくれ」と、おらんでおりました。しかし、こらえてやったら、後の復讐がこわい、手足くらい打ち折って、刃物など持てぬようにしなければ、島の平和ははかれない、と、誰もが分っておりましてので、「こん餓鬼や、思ひ知れ」などと口々に言い、次々に打ちつづけておりました。そこで私も、人垣の間から出て行って、江口の背中あたりに、かなり強く二回だけなぐりつけました。すると間もなく、「もうやめようや」という声がかかり、それでほとんどの者がやめたのです。そのとき、雨が降りだしたので、かわいそうに思っていたところ、何人かが江口を表にして、両手両足を四つに持ち、雨のかからぬ映画館の玄関の軒下^{はこ}に搬^{はこ}んで寝かせたのです。

このあたりから、背景の人影が動き出し、江口をかつぎ上げて退場しはじめる。

江口が搬ばれているあいだ、かかえられている江口だけを熱心に見ており

ましたので、誰が搬んでいるかは、よく見分けられませんでした。それから、三々五々、本通りを通って帰ったのですが、私はまっすぐ家に帰り、江口を叩いた棒を裏の薪束のあいだにさし込むと、布団を敷いて寝てしまったのです。翌朝になって、江口が死んだと聞き、驚くと同時に気の毒に思い、なにも死ぬほどなぐらなくてもよかったのではないかと、つくづく後悔したのです。

消防団長だけを残して暗転――

暗闇の中で、板戸が蹴破られる音、ガラスが割れる音、瓶を並べた棚が倒れる音、椅子が壁に叩きつけられる音、等々。二人の青年、ちんばとめ、かちが、スポットで浮び上る。二人とも、ごく普通の青年らしい服装。ちんばは立っている。義足のくせに、かなり自由な身のこなし。時折、短い桜の枝を杖がわりに使う程度。めっかは、腰を下ろしている。眼帯をした顔は傾きがち。消防団長と同じ書類を、膝の上に開いている。物音、短く、間歇的になる。時間とともに、間隔が長くなる。

ちんば（やはり不器用な朗読調。剣舞のように、手にした棒を振りながら）この島において、映画館やバーを経営している江口イタルの目にあまる乱暴に対し、仕返し为目的をもって殴り込みをかけ、無茶苦茶に叩いて叩き殺してしまった事件に

ついで、私達青年にはまったく責任がないのでありますが、しかしそのきっかけを作ったことについては、重々責任があり、またバー・キューピーにおいて乱暴狼藉をはたらき、商売できないまでに打ち壊してしまったことも、法にそむいた罪深い行為であったと、深く反省しましたので、ここに進んで自首して出たしだいです。また、江口を殴り殺したことは、行き過ぎではありましたが、それも元をただせば、私達青年がこうむった暴力に対する仕返しなのでありますから、当局におかれましても、なにとぞ恩情ある判断をもって、ご寛大にねがいたいと思うのであります。

消防団長（検事の立場で） それでは、江口が殺されたのも、当然だということです
ね？

ちんば 当然だとは思いません。

消防団長 しかし、殺されても当然のようなことを、江口がやったと考えている
のではないですか？

ちんば どんなことをしようと、殺されて当然ということはないでしょう。」

消防団長 では、なぜ、暴力をふるった島民たちを弁護するのですか？

ちんば けつきよく、私達若者に対する、親心だと思うからです。

消防団長 親心ならば、殺してもいいと考えるのですか？

ちんば そんなことは言っておりません。平和で淳朴な島民を……

めっかち (訂正して) 勤労島民を……

ちんば 勤労島民を……(言いよどむ)

めっかち かかる暴力に走らしめた……

ちんば かかる暴力に走らしめた、江口の挑発行為を心から憎いと考ええるのです。

消防団長 そのような挑発行為があった以上、殺されてもやむをえなかったと考

えるわけですか？

ちんば そうは考えません。どんな理由があろうと、殺されてもやむをえないと

言うことはないはずです。

消防団長 しかし、結果として、死んでくれて良かったと感じているわけですね？

ちんば 理由のいかんにかかわらず、いやしくも一人の人間に対して、死んで良